

最近の東南アジアでの旅行で気になる事は現地ガイドの質であります。大別すると、給与をもらって案内をするガイドとリポート、チップで働いているガイドの2種類があり、後者のガイドは観光よりも買い物、ショーへの誘いが多くなります。

私のように少人数でオプションな旅行をする者にとって、ガイドは非常に重要となります。陽朔の街の観光では日を別払いしてガイドをさせましたが、二次会でのカラオケ代金は10人で5万3千円という高額な請求でした。夜に中国の酒場で複数の中国人相手にケンカ談判をする事には恐怖を感じましたが、腹を決めて言葉は通じないながらも気迫で相手を攻め、なんとか2万5千円まで値切って手打ちとしました。

国外の観光旅行において、相手に言われるまま料金を支払ってきた日本人の人の良さ・気の弱さは歓迎されるというよりもむしろ軽蔑されていたのかもしれないと私は思っています。

3日目は龍勝の梯子田(棚田)を見せてくれるという事でしたが、あまり気乗りしないまま向かいました。バスで3時間余り走り途中昼食となり、この辺りからイワン族という赤い民族衣装の女性たちが多くなりました。さらに5~6百米登ったと思われる所で小型バスに乗り換え、一時間余りで行き止まりとなりました。そこには白雲の中に無数の棚田がいくつもの山を渦巻くように広がっていました。ガイドに「何枚位あるの?」と聞くと「数えきれない!!」と無愛想な答えが返ってききましたが、この答えがまさに適切でした。標高千米をこえる壮大な山々に刻み込んだ様な棚田の数は数えられるものではありませんでした。ここから山頂までは胸つき八丁、山駕に乗って登りました。昔の洗濯板を並べた様な薄い石板段を数えてみたら二千四百段で頂上へ着きました。山駕代は日本円にして3千円でした。この山岳村の産業は観光収入-それも旅行者とその荷物を始め建材、食料などを運搬するシェルパーの収入-が大きな収入源の様でした。その夜は西江四湖のナイトクルージングでした。ディズニーランドの様にぎやかさはありませんでしたが、山水画のような大自然を背景にライトアップされた桂林の夜景の金銀、紅燈、玉楼はまさに王宮庭園で、歓声と嘆声の連続でした。ライトアップが消えると闇の中から鵝と鵝匠の乗った舟が現れ「鵝飼いショー」が始まりました。私が見物船の最先端に座って見ていたところ船首に「黒子」が一人!よく見るとこの黒子は、観客に分からない様に鵝たちにそっと魚を与え、あたかも川の中で魚を捕まえてきた様な巧みな演出をしていました。しかし、これもショーを面白くする為の必要悪と思わず苦笑いをいたしました。

君津にも小糸川、小櫃川の二つの川が流れ、それぞれの経済圏を形成してきました。関東大震災までは川底が深かったので、江戸時代には三島や久留里あたりから薪炭、米穀類、材木、更には酒や瓦を江戸まで運ぶ航路がありました。江戸からは一茶を始めとして多くの文人、墨客が訪れて港町の紅燈、文化、経済のにぎわいを作ってきました。-今はなぜそれが無いと問われるならば-私達は生産性のない不労所得の経済にあこがれ、本業を怠り、後継者を育てることを怠ってきたから・・・? 現在、中国は国を挙げて汗を流して働いております。その働く中国に追い越されようとしています。中国への凡そ三兆円という日本唯一の貿易赤字が証明する通りです。君津を始めとする君津四市(かずさ地域)は県内でも有数の経済発展の可能性を秘めた地域といえます。いろいろな発展条件が何なのかは、良い友人を多く持ち交流することにより、それが鮮明に見えてくるはずですよ。会議所を通して良い友人を作ってください。9月28日に予定されているビジネス交流会がその一助になればと思います。